

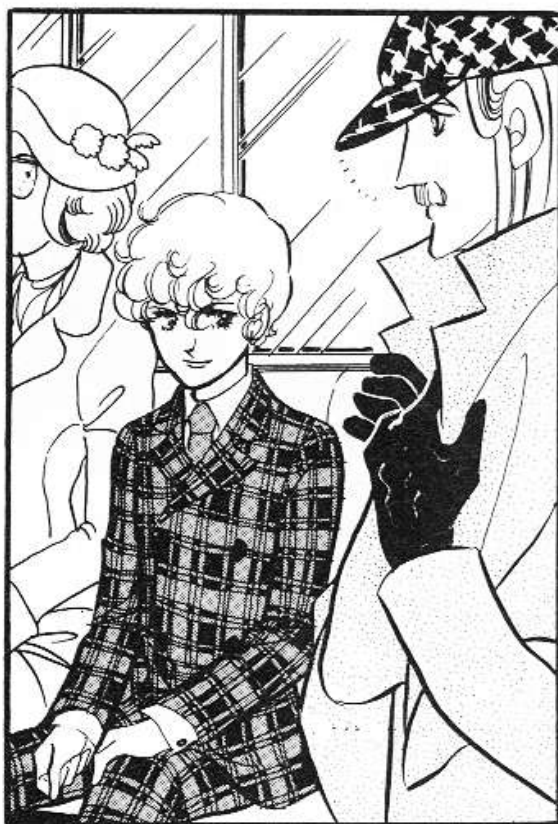
# ホームズの帽子<sup>ぼうし</sup>





1934年  
ロンドン

わあ  
そのあ  
そのバ  
ス









髪を  
切りたまえ  
ジョン・  
オービン!



だってね  
髪の長い  
人間の方が  
靈感が  
働くって  
いうから

ジェルソン  
社長から  
新刊の  
企画を聞いて  
おまえを  
使おうと  
思ったんだ

マック  
編集長



オービン  
年はすぎる  
ぞ 考えろ



クレイバス  
がイゾルデ  
嬢に毎日  
白バラを  
贈ってる  
そうだぞ



今は夢路の  
扉を閉じぬ

古い  
時間は  
もうすぎた

いかゞが  
オービンさん

けっこう  
なかなかいい



不思議な  
気配を  
成したり



血のさら  
ならべて  
魔物を  
呼んだり

五方  
星の  
陣の中



わたしは  
男の人の仕事に  
モンクを言う気は  
ないわよ

ただ髪の長い夫は  
いやだっていうのよ

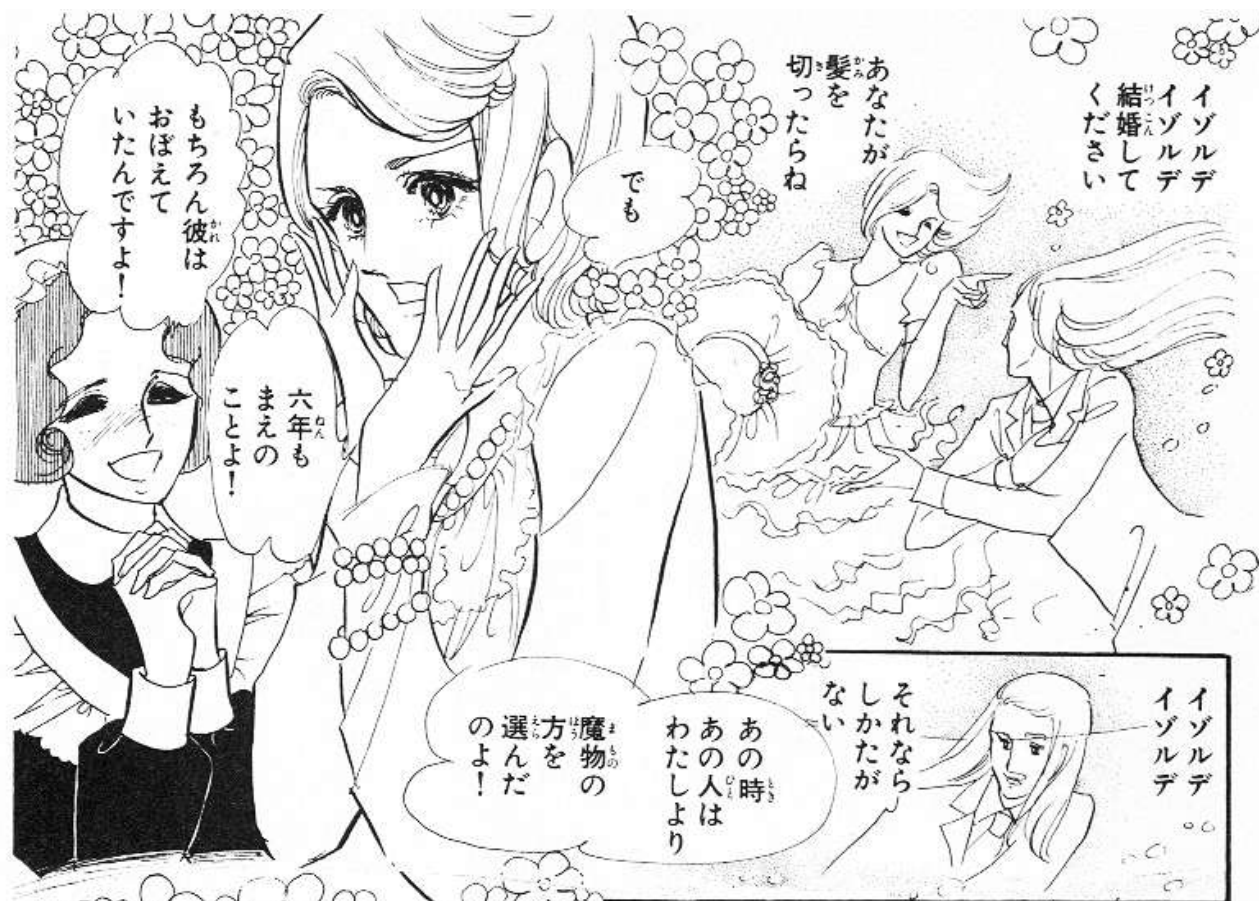
みごとに  
白いバラ  
ですこと  
お嬢さま

ええ  
ケイシイ・  
クレイバス  
からよ

ところで  
今夜は  
お客さま  
ですって?

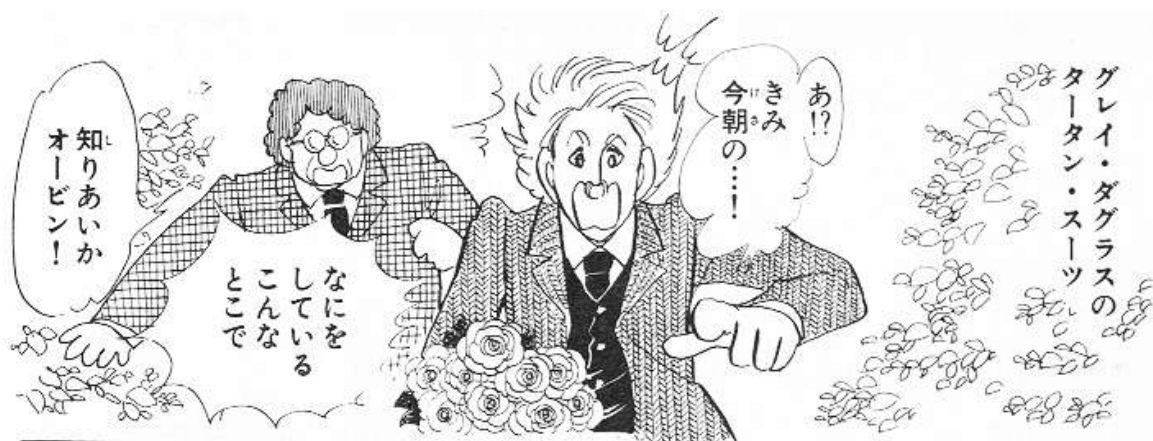




























それぞれの家の  
柱のかげに  
森の泉に  
古い城に

どれほどの  
小妖精が  
魔物が  
かくれてるか

人びとが  
いかに  
それらを愛し  
伝説として  
伝えているか

この寒い  
国の人びとの  
たれもがそれを  
愛し  
さがして  
るのでは  
ないか

だからぼくも  
その存在を  
愛し  
信じられる

そしてぼくが  
なにかの  
妖精に  
出会っても

見せ物に  
したり  
大衆に  
さらしたり  
せずに

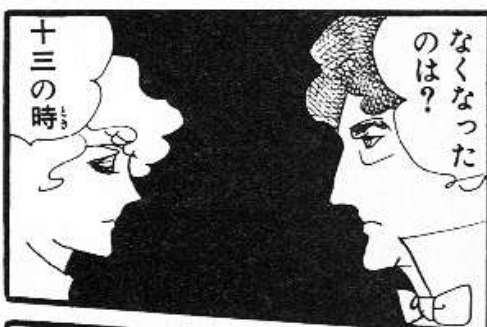
ぼくもまた  
伝説にたくして  
そつと後世へ  
伝えたいと  
思っ  
きたのだ





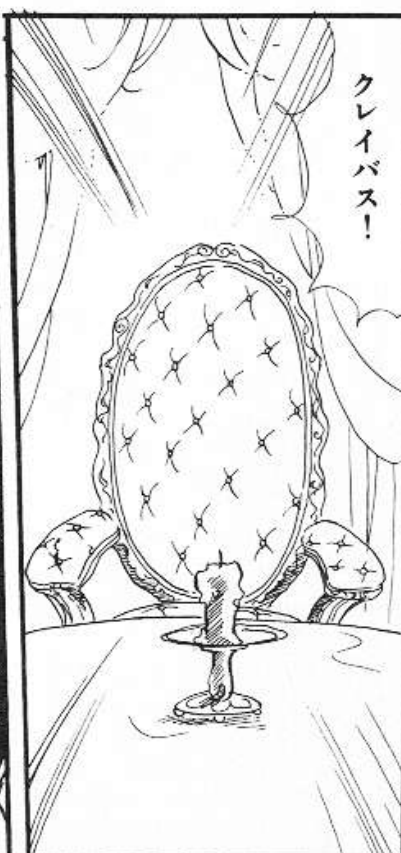






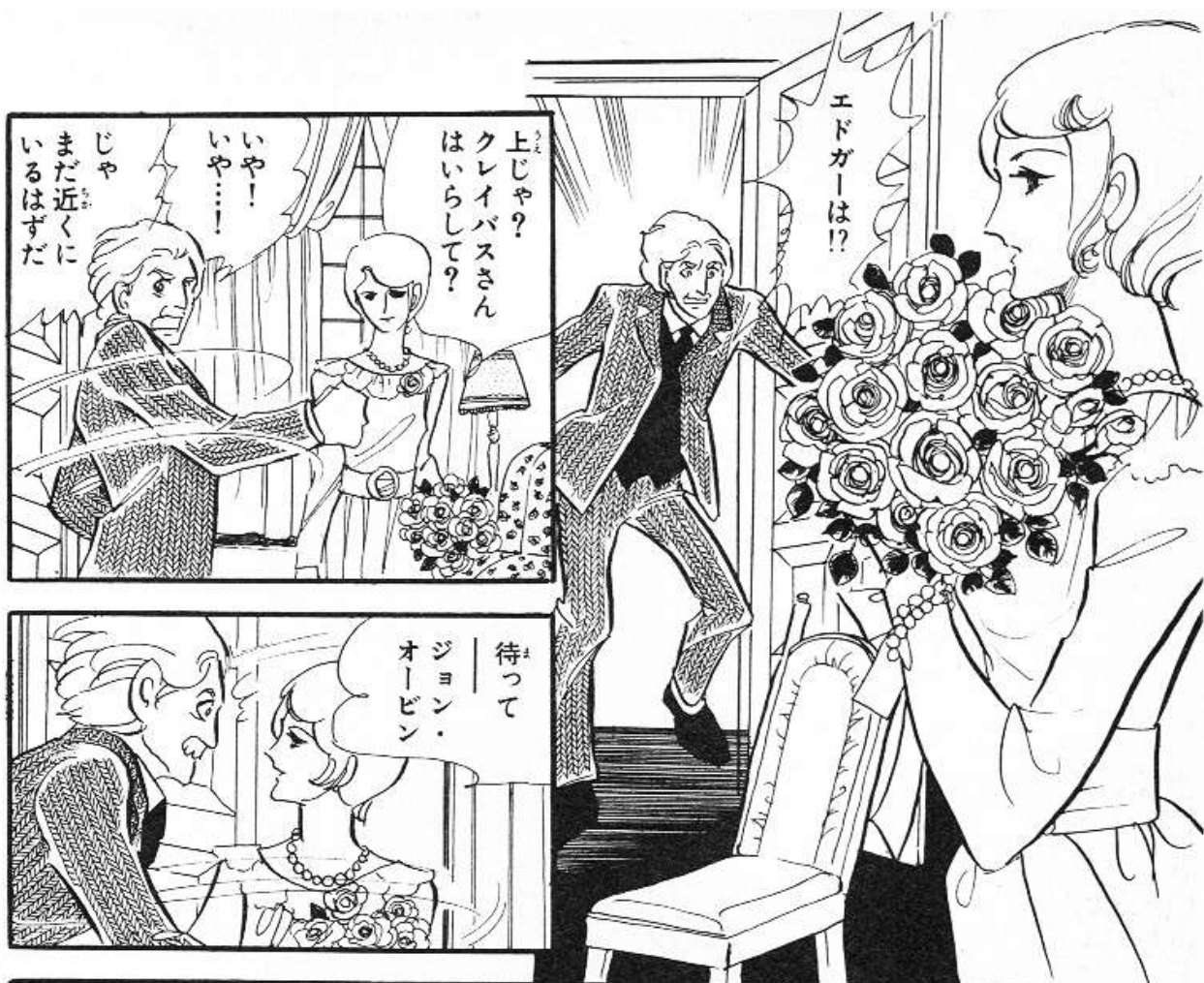


カッ



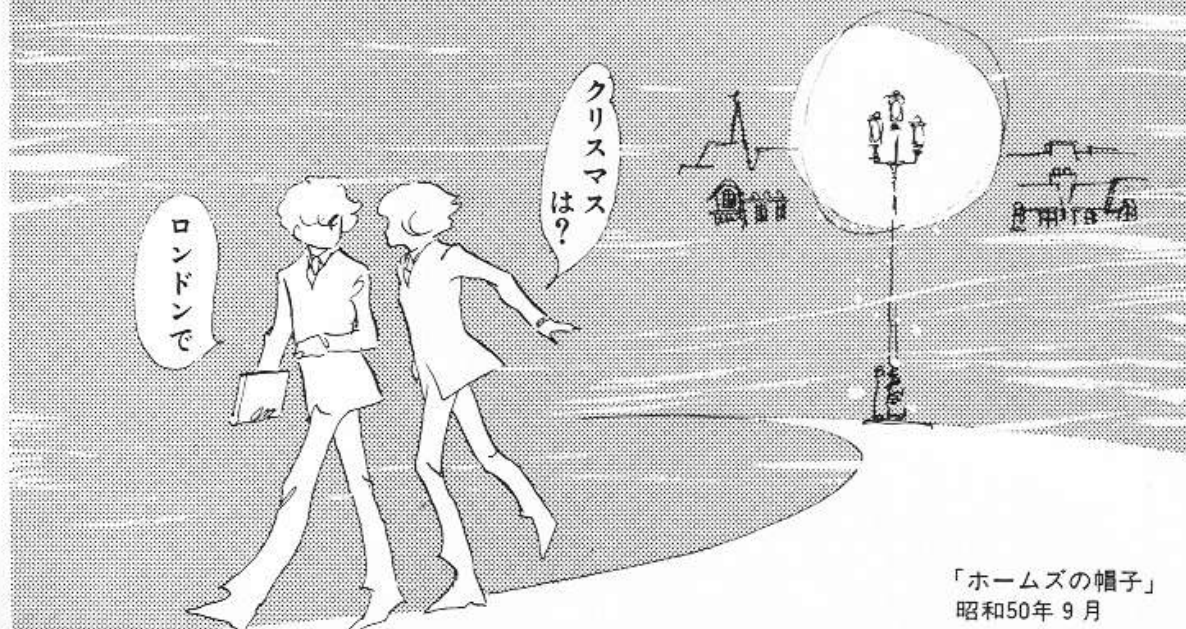












ポールの一族 第二卷——終わり——